

柳田國男の神道研究

茂 木 栄

はじめに

明治以降、戦前までの神社神道は、国家の宗祀とされ、特殊な状況を呈してきた。

伝統的な日本の集落の一般的な風景は、集落の背後には山があり、山宮もしくは奥宮が祀られていた。山の水源から流れ出る水は集落の水田を潤し、水田には田宮が祀られ、家並みは往還（街道）を挟んで発達し、往還から直角に山に向かつて参道が延びている。参道の奥にいわゆる鎮守の森があり、神様が鎮まっている里宮がある。山宮、里宮・田宮という垂直の方向性と集落を貫く往還の水平の方向性があり、神社は背後の広大な神体山と広い神社境内地、神田を含む神社の耕作地を持っていた。つまり神社は点ではなく面で存在していた。

明治政府が目付けたのは、神社の広大な社有地だった。

明治四年一月五日付、社寺領上知令の太政官布告が出される。同年五月十四日神社はすべて国家の宗祀たるとし、世襲神職を廃止し以後は精選補任とした。同年七月四日付け、神社の本社建物以外を上地させる旨の太政官布告がだされ、本社建物の雨だれの落ちる範囲の境内地以外は国有地とされたのである。と同時に、これまで一〇〇〇年以上の長きに亘って、神社を守ってきた社家が廃され、地方の有力大社には地方の名士が国家公務員として官司に就任する例が多かった。

阪本是丸氏は憤りを込めて述べている。

明治四年の社寺領上知によって、神社は広大な自然環境を一举に失った。今でこそ神社といえば社殿と参道を囲む「現有境内地」という觀念が一般化しているが、上知令以前の神社の「境内」とはもっと概念の広いものであったのだ。山林や田畑があり、小川が流れ、そこで人間は神々と

共に生きてきた。だが、神をも恐れぬ官僚たちは、神社の境内地を他の封建的土地所有と同一視し、社殿が納まるだけの境内地があれば充分であるといつて、他の一切の境内地（山林・田畑等）を強制的に公収したのである。しかし、戦前までの神社人や氏子たちは少しでも昔の境内地に近づけようと努力し、民有地となった旧境内地を買い戻し、さらには国にその返還を求め続ける運動を絶え間なく行つた。こうした先人の努力の賜物が現在の神社境内地なのだ。と指摘する。

宗教性とともに政治性を帯びた神社神道という、これまで日本の歴史上に無かつた新しい形の神道を作り上げた。そして、敗戦により神社神道の後ろ盾となつていた国家の支えが消える。戦後神社神道は、どのようにその存立基盤を確保して行くべきか大きな課題を突きつけられた。

一、柳田國男の学問

明治八年生まれの柳田は、東京帝国大学を卒業すると農商務省に入省し、農政官僚としての道を歩んで行く。明治後期の農業の近代化路線を支えたのも柳田國男であつた。また、柳田は大正天皇の御大札の政府側スポークスマンを勤めた。貴族院書記官長という貴族院議長に次ぐ要職にありながら、大正八年には職を辞して官界を去つた。農政官

僚として日本の近代化（＝西欧化）を推し進めてきた柳田は、官職を辞すると、官僚時代とは正反対の日本の伝統と庶民文化の発見、その価値付けの学問構築に邁進して行くこととなる。「日本民俗学」という柳田國男が日本の学問伝統を継承しつつ誕生させた、日本オリジナルな学問がそれである。

日本の近代と柳田國男の研究を『近代化への挑戦―柳田國男の遺産』⁽²⁾としてまとめたアメリカ人、ロナルド・A・モースという。柳田國男は、日本の立場から近代化に挑戦すれば、日本独特の近代化が生まれるのではないかという発想を持ち、日本各地を調査し比較することで、日本人の慣習と心理に関する根本的事実を解明したいと思つていた。彼が日本の国民性の伝統的根源を探し求めたことは、日本人に共通する感覚に対する興味に端を発しており、日本の近代が国民の一体感を確立しようと努力したことの一部であつたと述べている。（ロナルド・A・モース「アマチュア精神に富んだ日本のふくろう」）。柳田國男の創りだした日本民俗学は、ロナルド・モースによれば、国民的一体感確立を一つの目的とした、国民性の伝統的根源を求めた学問であつたといふことができる。

戦後の神道人が注目したのは柳田國男の民俗学であつた。柳田國男が理論化した日本固有の信仰は、柳田にとつては

広い意味の神道のことであつた。神社神道というのは神道の一つのあり方で、民間信仰が基にあつて、その上に成り立っているのが神社であるという考え方を戦後の神道人は受け入れたようにみえる。

二、民俗学と神道の関係に対する戦後神道人の認識

『神社新報』の主張欄で、かつて神社本庁の教学研究所に在籍した佐野和史氏が「民俗神道」という概念³という、非常に注目すべき論説を書かれている。この内容を筆者なりに、以下の四点にまとめてみた。

①盆と正月が先祖祭、神祭の行事であり、祖霊あるいは穀霊を迎へ、そして送る行事により構成されているということ、我々は多分に柳田、折口両先生、さらには原田敏明先生達以降の民俗学の恩恵によって知識として身に付け、また理解もし納得もしてきた。

②盆の行事は（中略）仏教渡来以前からわが国固有の先祖祭祀の姿を留めるものであつて、仏教行事というよりむしろ神道の行事であると言つてよいものと考えている。こうした民俗学による各種行事の解釈は、ことに戦前に「特殊神事」と呼ばれた伝統的神事芸能の理解の上でも有効であつたことから、戦後のいわゆる国家神道を

脱却してこうとする神社と神道にとって、重要な理論構築のための原理ともなつた。

③ある時期の神道は、自らを説明するのに仏教の教理を応用し、神仏習合を生み、またある時は儒学の学理により、神儒一致の理論が登場したことに似て、昭和の神道の特徴は「民俗学習合神道」ともいえる要素が濃くなつた。民俗学の恩恵は、神道学の進歩の上には多大であるが、それを優先させてしまふ現象がなくてはならない。

④民俗神道の概念をどう捉えるか。民俗神道と神社神道の範疇の違いは？

といった観点から、戦後の神道の理念的支えとなつた民俗学と神道の関係を論じている。

しかし、ここで一つ誤解があるのは、佐野氏は「柳田、折口、原田敏明という特定の三人の先生達以降の民俗学の恩恵により」と認識している点である。おそらく佐野氏は、折口信夫、柳田國男、原田敏明の三人の先生を念頭に置いてこれらを書かれたものと理解するが、戦後の民俗学において神道に対する興味とシンパシーをもつて研究に当たつた民俗学者はごく少数である。僅かに岩崎敏夫、石塚尊俊、牛尾三千夫といった國學院出身のしかも神職の方たちを数えるくらいであろう。戦後、神道に共感と温かな目を持つて研究を進めた民俗学者は國學院大學出身者のみであつた

といえる。

三、民俗学者の神道に対する態度

民俗学者の神道に対する態度というのは三つのタイプに分けることができるであろう。

①折口グループに特徴的な考え方である。発生論的な立場から、歴史的には古代民間信仰から神社は成立し、宮廷神道の影響を受け画一化を経て現在に至っている。神社は古代的な存在というふうに見える考え方。

②民間信仰の歴史を遡れば、神社信仰と重なる点が多くなる。民間信仰は日本人の信仰の根底にあつて、日本神道の移り変わってきた一つの姿とする。同時に神社もまた日本神道の移り変わってきた一つの姿だというふうに見える考え方、これは柳田國男と若干の柳田のお弟子さん達、原田敏明もおそらくこの第二の道に入ると考える。

③戦後特に顕著な考え方である。民衆というものを支配・被支配の関係として捉え、特に常民文化を尊重する立場から、神社と民間信仰とを切り離して考えるという見方。これは戦後の民俗学者、民俗学界の大きな勢力として民俗学者を育ててきた、教育大系統の民俗学者の方々に非常に多い立場、態度ということがいえるかと思う。

以上三つの民俗学者の神道、それから神社に対するアプ

ローチの態度というものが見られる。

佐野和史氏が『民俗神道』という概念⁽⁴⁾という論説の中で、戦後の民俗学が神道の理論的支えとなってきたとするのは少々認識が違う。戦後の民俗学が神道の理論的支えとなつたのではなく、戦前の民俗学の成果が戦後の神道の理論的支えになつたのである。それはまさに柳田國男の神道研究であつたというふう⁽⁵⁾に訂正しなければならないだろう。

四、柳田國男の神道研究の評価

柳田國男は、「神道のために」⁽⁴⁾の中に折口信夫との「神道の原初形態」と題した対談を収録している。この対談はもととNHKの「神道の時間」というラジオ番組で昭和二十四年二月六日に全国放送したものであつた。それだけに大きな影響力があつたものと思われる。

折口信夫は柳田民俗学的神道論を次のように評価する。

「神道がこのごろ大変私どもにも変つたような気がいたします。戦争以来神道の重要な部分になつておりました政治性というものがすっかり改められてまいりました。そのために神道が一時は立つ瀬がない、どうなつて行くかわからないくらいに案じられておりましたが、その際にちょうど昔からお続けになつておりました先生の神道論が、盛ん

に出て来まして、ちょっと政治性がない——悪い意味の政治性のない先生の神道論が、神道にとって、われわれ神道に直接関係あるものから申しますと、本当の救いになったと思ひまして、その点感謝しなければならぬ。」

と述べる。政治性を失い崩壊しかけた戦後の神社界にとって、柳田の民俗学的神道論が神社神道の存在を意味づける理論的な支柱となったのである。

また、柳田國男は文献の記述のみを信じることを戒め、民間信仰での姿と比較しなければ真実がわからない例として「祭と木」「信仰と木」の問題を好んで話題にした。特に「幣帛」を「みてぐら」とする訓みが六国史には多数でてくるが、幣帛とみてぐらは本来違うものであった。それが複合してゆく過程を学生に論ずることを好んだ。柳田は神の依り代、神の依る坐(クラ)を神道の重要な論点と考へていた。

五、柳田國男と折口信夫

——神道研究は大正度大嘗祭、依り代研究から

昭和二十六年四月、『神道宗教』に「鳥柴考要領」⁽⁵⁾という論考を柳田國男は書いている。これは『定本柳田國男集』第十一巻の『神樹編』の一番最後に収録されている論考である。

『神樹編』に収録されている「柱松考」とか「柱松と子供」「龍燈松伝説」「旗鉦のこと」などの論考は、戦前における柳田國男の初期神道研究と考へていい論文であらう。これらが書かれ始めたのは大正四年である。大正三年から構想していたのであるが、この時に奇しくも折口信夫もまた同じタイトル、同じテーマで依り代の研究を行っていた。これは良く知られた話であるが、記しておこう。『郷土研究』大正四年三月号に柳田國男の論考「柱松考」⁽⁶⁾が掲載された。四月号、五月号で折口信夫の「髭籠の話」、これが『郷土研究』に載った。これについて折口信夫は、前から投稿していたのに、何時になっても載らないので、採用されなかったのか、どうしたことだろうと非常に落胆していた。すると三月号に柳田の「柱松考」が載って、次号で自分の論文が載ったということ⁽⁷⁾を語っている。その後も折口はこのときの大正の大嘗祭の標山に対する関心から、「盆踊りと祭屋台と」、「依り代より『だし』へ」、「幣束から旗さし物へ」、「だいがくの研究」、「まといの話」というように『郷土研究』への投稿、掲載を続けていく。同じように柳田も「諏訪の御柱」、「腰掛石」、「左義長問題」というように、同じような柱、依り代のテーマで、競い合いながら神道研究に入っていくといえる。

あまり柳田國男と折口信夫の学問的な対抗を強調するこ

とは本意ではない。注目すべきは「鳥柴考要領」という、『神樹篇』の中で一番最後に書かれた論考である。これは先述のように戦後の昭和二十六年四月号『神道宗教』三号に掲載された。

六、「鳥柴考要領」戦後、柳田國男の神道研究

非常に変わったタイトルである「鳥柴考要領」。「要領」とはいったい何なのか。「要領」というのは柳田國男の言葉を借りると、「終戦の少し前から数年にわたつて心がけてゐる一つの論考の主要を、できるだけ簡単に短い時間で述べ立てる練習をしてみたい⁽⁸⁾」と述べている。「できるだけ簡単に短い時間で述べ立てる練習」それが「要領」ということである。なぜ柳田にそのような練習をする必要があったのか、短い時間で述べ立てることが必要だったのかということを考えてみたい。

『神道宗教』の二号が刊行されたのが昭和二十四年の十二月。ここで「神道の諸問題」という座談会が行われている。当時の堀一郎・岸本英夫・平井直房・安津素彦・白井永二・岩本徳一など、國學院大學に関係する神道の研究者達が集まって、折口先生を囲むという企画が行われた。そこでさまざまな問題が論じられた。このことと「鳥柴考要領」とどのように関係するののかといえば、折口信夫の発言

の中で「和御魂と荒御魂」の話があり、推古紀に見える「霹靂木に小き魚となつてかかった雷神」の話を折口信夫が紹介している。

このことが直ちに「鳥柴考要領」という論考に結び付いたとは断定できないが、一つのきっかけになったと考えられる。

「要領」があるからには、要領の付かない「鳥柴考」という論文があつて然るべきだと考えられるが、これは長い間分からなかった。というのは『定本柳田國男集』にも勿論収録されていない。「鳥柴考」という論文があるかどうかとも謎であつた。娘婿の堀一郎は「鳥柴考」という論考を柳田國男が書き直しているということを日記の中に記している。であるとすると「鳥柴考」論文は一体どこへ行つてしまったのだということになる。これが平成八年四月頃、鳥取で発見された。それが鳥取民俗懇話会報二号に掲載されている⁽⁹⁾。そして「鳥柴考」と同時に「鳥柴考の謎と一考察⁽¹⁰⁾」を、西尾肇氏が執筆している。それによれば、「鳥柴考」は鳥取の郷土史家の家から発見されたものだそうである。当時、終戦を迎える少し前であつたというが、鳥柴についての資料を柳田國男が集めていた。それを聞いた鳥取の田中新次郎という方が柳田に資料を提供した。提供したことによつて、多分写しをもらったのではないかと西尾氏

は推測している。田中新次郎のお孫さんが教育委員会に勤めており、今になり偶然、発見された。それを朝日新聞が取上げて、全国的に知られることとなったとの西尾氏の解説である。

柳田國男は「鳥柴考」という論考をやはり書いていた。であるなら「要領」があつて「鳥柴考」があるのか、「鳥柴考」が先にあつて「鳥柴考要領」をまとめたのかということになる。実際の原稿は昭和二十年の十月二十五日の段階で、「鳥柴考」の書き直しをしていると堀一郎氏が日記に記している。その清書の手が、柳田の三女の堀三千氏によるとなっている。戦後はほとんど鎌田久子先生、丸山久子氏の両氏が清書をしていたということを考えると、やはり戦争直後にこの論考は書かれていて、そして写しが田中家に送られたと推測できる。そうすると書き置いていた「鳥柴考」を『神道宗教』二号「神道の諸問題」で様々論じられたその次の号に、急遽非常にコンパクトにまとめて出したということになる。そう考えると「鳥柴考要領」というのは非常に意味が出てくる。

ここで「鳥柴考要領」の要点を記してみよう。柳田はここで「鳥柴」というクロモジの木の意味を問いたかったのである。神様にお供えするとき、クロモジの木に獲物の肉を付けてお供えする。そういう習俗があるのだと。これは

「餅花の福木」であるとか、「御幣餅」、特に中部地方で有名であるが、これらはもとをたどっていけば「幣束」「幣」に至るのだということを、実証的に様々な資料を使って論じている。アイヌの「イナオ」も同類であり、そして門松や拝み松、これに食物を吊り下げたり、食物を直接掛けたり、例えばとろろを掛けるとか小魚を掛けるとか、そういう習俗を論じながら、鳥柴というのは神道における幣束の原形だというふうに論じてゆく。想像するに、それをいわゆる実証的な神道研究の手法というふうに柳田國男は考えたのであろう。

「神道の諸問題」の中では、確かに諸問題をいろいろ論じてはいるが、具体的な話ではなくて、さまざまな問題点を論じているということ、実際に研究者の態度として、実証的に神道研究をするのはどうしたらいいかということ、は、一切論じられていない。それを柳田は次の号、三号で手本を示したと読むことができる。

七、「神道宗教」における「門松」論議

それから『神道宗教』十六号に、多分この「鳥柴考要領」を受けた形で特集を組んだのだらうと推察するが、「門松」の特集という、『神道宗教』にとってこれまでのものとは非常に異質なタイトルのものが出てくる。國學院大

學の神道研究にとって、習俗・民俗の研究は異端だったようであるが、なぜ門松が急にここで出てきたのか不思議である。とにかく「門松」というタイトルで「共同研究課題欄」というものを新たに設けて始まる。

『神道宗教』の編集を当時担っていた編集委員の一文「編輯委員の辞」から非常に恐る恐るこのタイトルを出しているということがよく分かる。例えば「次に掲載する原稿を御一覽下されば新聞社が街頭から拾った記事とは、些（いささ）か面目を異にしている点にもお氣付きのことかと存じます。……毫も本誌読者としての叡智が窺えぬといえます。……それこそ由々しい問題であります。とにかく門松という風な卑近な風習をどう処理せられるか伺おうと存じます」というように、こうした民俗学的な具体的なテーマは、読者の反発を予想し、恐々設定している。ということとはやはり神道研究にとっては、民俗学的な分野というのとは、卑近な風習と考えるのが当時の一般的な考えだったと言えるのかもしれない。民俗学に対する神道学者達の態度というのがあったのであろう。

しかしながらその正反対とも言える先述した佐野和史氏のような認識が、神社人、神道人の間にあるというののも、面白いものである。つまり、民俗学を神社神道存立の理論的支柱とする一方で、民俗学が研究対象とする民間信仰は

卑近な習俗であるとの反発があるという両価的な存在であったといえる。

八、戦後の柳田國男と折口信夫の神道・神社研究

柳田國男が本格的に神道研究に力を注ぎ出したのは、日本の敗戦を悟った時からと考えられる。『日本の祭』『神道と民俗学』『先祖の話』、これらの著作は戦中から敗戦後の日本人の精神と誇りを如何に保つことができるか、この目的のための構想から生み出され、『先祖の話』は昭和二十一年四月敗戦直後に刊行されたものである。それから『新国学談』、『祭日考』『山宮考』『氏神と氏子』へと続いていく。『新国学談』は第三冊で終わっているが、「鳥柴考」を『新国学談第五冊』として出そうというふうに柳田は考えていた。これは『氏神と氏子』の中で柳田自身が述べていることで、『新国学談』の刊行をさらに続けていくということとが構想としてあったのである。

柳田國男がなぜここで戦中から急に神道研究に乗り出していたかということについては、ロナルド・モースの見解がある。それは『炭焼日記』から「友人や親類縁者を失ったとき人々はいかにそれを迎えるか、といったことに思いをめぐらす時、柳田は父（松岡約斎）が関心を抱いていた神道を思い返していた。柳田の戦時期の論文や著書に

は、彼が宗教的なものへ関心を傾けていったことが伺われる。⁽¹³⁾」と述べている。そして柳田自身、『私の哲学』という

昭和二五年に中央公論社から出版された本に、何人かの学者の哲学が書かれてある中で、柳田國男は「村の信仰」というタイトルで一文を載せている。そしてその書き出しは、

「私の生家は神主をしていた。それも世襲の神主ではなく、元来医者であつたが医者は流行らないし、三十前後から時代に促されて国学をやつた父は、明治初年に私塾と神主をして暮らしを立てたのです。すなわちいわゆる三大人（真淵・宣長・篤胤）の影響を受けた人でした。従つてそういう側の人が多くするように歌をやりました。はつきりとは記憶していないが、私は小さい頃、これが当たり前だと思つて感化を受けていたものは神道だろうと思います。⁽¹⁴⁾」というふうな自分の哲学ということを述べている。さらに、柳田には「父の死と自作のノリト」⁽¹⁵⁾という文章があり、柳田國男は自分で祝詞を作つて、父親の亡くなった一周忌に自作の祝詞を詠んで慰めた。それは、千葉県布佐に居住していた二十二歳、明治二九年の話である。まともに祝詞が詠める神主さんがいなくて、金毘羅行者に頼んだという。それは、最初お葬式の時に大祓しかできなくて、それは悲しみのためにあまり気がつかなくたけれども、とにかく大祓で済まされたのでは良心が済まぬということで、一周

忌の時には自分で祝詞を作つたのだという。

自ら神主になるということも、柳田國男は若い頃経験している。さらに、亡くなった父親に祝詞を自作して慰めるというようなことも行つていた。

最後に堀一郎が『定本柳田國男』の月報の第十一に書いている。

「戦争末期に極端に利那的な戦局の話や、戦災の絶望的な噂話を嫌われた先生は、すでに遠い戦後の日本に思いを馳せ、精神的支柱を失つて崩壊し去るかもしれぬ民族と祖国の将来を、深い憂いをもつて日夜考え続けておられたことは、幸いに近くに住み、親しく接していた私にはよく分かつた」⁽¹⁶⁾堀一郎は説明するまでもなく娘婿であつた。

「この頃から逝去に至るまで、先生と私との間にはおかしいほど家庭のことも経済のことも問題にならなかつた。大部分は日本の神道の将来と日本人の信仰の問題であつた。実父約斎先生の強い影響もあつて、先生の学問の底には早くから愛国の情熱が流れていたことは、人のよく知るところである。しかし、戦争末期から戦争後にわたる学問は、もはや愛国以上の切羽詰まつた憂国の熱情が、神道研究の上に迸つた感が深い。しかもそれは決して単に専門神職のための神道研究、理論や考証の学としての神道研究ではなかつた。実に精神的混迷の中に投げ出されている一般民衆

に、自己と民族に内在している価値を見出させ、そして自信と誇りを実証的裏付けをもって与えようと試みた研究であつたことは、見逃してはならないように思う。⁽¹⁷⁾

と堀一郎は述べている。つまり戦後の民俗学というのは柳田國男が意図して、戦後の日本を如何に位置付け、そして国民を如何に導くかという思いから出た探求であり、その大きな柱が神道研究であつた。それは、柳田が意図した通り神道人、神社界が後々受け入れることとなつた。先述の佐野氏の「民俗学習合神道」との認識はその結果だつたということができる。

註

- (1) 阪本是丸「神道と土地問題」『神社新報』主張欄、平成二年五月十四日付
- (2) ロナルド・A・モース『近代化への挑戦―柳田國男の遺産』NHKブックス、一九七七年刊
- (3) 佐野和史「『民俗神道』といふ概念」『神社新報』主張欄、平成八年八月十九日付
- (4) 民俗学研究所編『民俗学の話』第三部「神道のために」昭和二十四年六月刊
- (5) 柳田國男「鳥柴考要領」『神道宗教』三号、昭和二十六年四月刊
- (6) 柳田國男「柱松考」『郷土研究』大正四年三月号
- (7) 池田彌三郎『私説折口信夫』中央公論社、昭和四十七年、

- 一〇四―一〇五頁
- (8) 柳田國男「鳥柴考要領」『神道宗教』第三号、昭和二十六年四月刊、一頁
- (9) 「鳥柴考」『鳥取民俗懇話会報』二号、平成八年十月刊
- (10) 西尾肇「鳥柴考の謎と一考察」『鳥取民俗懇話会報』二号、平成八年十月刊
- (11) 「編輯委員」の辞「神道宗教」第十五号、昭和三十二年十二月刊
- (12) 「氏神と氏子」『定本柳田國男集』第十一卷、筑摩書房、昭和三十八年刊、五一〇頁
- (13) ロナルド・A・モース『近代化への挑戦―柳田國男の遺産』NHKブックス、一九七七年刊
- (14) 柳田國男「村の信仰」『私の哲学』中央公論社刊、昭和二十五年
- (15) 柳田國男『故郷七十年』『定本柳田國男集』別巻第三、筑摩書房、昭和三十九年、一八九頁
- (16) 堀一郎「『新国学談』のころ」『定本柳田國男集』月報十一、昭和四十四年刊、七頁
- (17) 前掲文(16)に同じ

(國學院大學准教授)